

おばあちゃん 風呂に入りよ

ぼくの家は、市営住宅の十一階です。地しんの日から、半月以上断水が続きました。毎日、何度も何度も、給水車まで水をくみにいかなければなりません。とてもしんどい仕事でした。

水くみを始めてまもなく、ぼくは、あまり会うことがなかったとなりのおばあさんを、何度も見かけるようになりました。おばあさんは足を引きずりながら、小さなやかんを持って来ていました。足が悪くなっていたらしく、小さなやかんも大変な様子でした。ぼくは、「足が悪いのに、つらいやろうな。」と思いながら、「水をくんできましようか。」の一言が、なかなか出ませんでした。

ある日の夕方、近所のおばあさんが、となりのおばあさんのために水くみをしているすがたを見て、「自分も大変なのにすごいなあ。」と思い、家に帰って、母にこのことを言うと、

「助け合うのは当たり前や。何で手伝ってこんかつたんや。」
と、おこられてしまいました。

それから何日かして、いつものように水くみのために下へおりていくと、となりのおばあさんも小さなバケツを持っておりてきました。母が、おばあさんを見かけて、

「お風呂に入ってる？」
と聞くと、おばあさんは、

「ずっと入ってないわ。だから、体が気持ち悪うて。」

と答えました。それを聞いた母は、

「風呂に水をはってあげるから。わかして入りよ。」
と言いました。

「風呂いっぱいの水は大変やから、いいよ、いいよ。」

と、おばあさんはことわりしましたが、顔がとてもうれしそうでした。母とはよく口げんかをする
が、その時は、母を尊敬しました。ぼくは、家の水くみでつかれていましたが、

「ぼくもくむわ。」

と母に言うと、

「当たり前やろ。早うポリ容器持つといで。」

と言われました。

二十リットルのポリ容器で、風呂をいっぱいにするのは大変でした。母といっしょにがんばって
いると、弟や近所のおばさんたちも、バケツを持ってきて手伝ってくれました。風呂に水を入れる
たびに、おばあさんは、

「ありがとう。ありがとう。」

と、くり返し言いました。それを聞くと、

「もつとがんばるぞ。」という気になりました。

よく朝、おばあさんが家に来ました。

「きのうは、久々にお風呂に入れて、とても気持ちよかった。本当にありがとうさんでした。」

と、声をつまらせながら、何回も何回も頭を下げ、帰って行きました。その時、心の底からうれしさがこみあげてきました。

本資料の著作権は兵庫県教育委員会に帰属します。
本文のすべてまたは一部について無断で複写して使用することを禁止します。